

#### 四 東南アジア語学科と『東京外大東南アジア学』

現在、外国人を含めて専任二四名、非常勤講師六二名の大所帯をなすわれわれも、四〇年前は次のようにごぢんまりしたものであった。

##### 第七部第二类（インドネシヤ）

助教授 伊東定典、渋谷元則

非常勤講師 朝倉純孝、藺田顕家

外国人講師 ヨハネス・マリア・ウマンズ、ラデン・バグス・スマントリ

##### 第七部第三類（シヤム）

教授 河部利夫

助教授 松山納

講師 中島慰

非常勤講師 飯塚ウライ、尾野秀一、田中忠治

外国人講師 アムヌアイ・イサラクーン・ナアユタヤ

この一九五八（昭和三十三年）、田中忠治は専攻語の授業の中で「タイ事情」（当時は今言う「地域基礎」、その前身は「前期事情」、が独立していなかった）を講じ、また一九六一（昭和三十六）年には、タイ科の特殊講義として

永積昭「東南アジア植民史」、王瑜「東南アジア華僑社会の文化」が、そして翌一九六二（昭和三十七）年には、インドネシア科に西川五郎「熱帯農産事情」が加わってくる。非常勤講師を迎えての多彩な講義開設の初期の姿である。現在の非常勤講師の数と比べて、如何にも今昔の感が深い。

このわれわれが、一九九五（平成七）年の大講座制への改組という学部改革を先取りするかたちで、一九九二（平成四）年合併し、「東南アジア語学科」への拡充改組を実現した。他の学科の一步先をいつていたわけである。

われわれはもちろん東南アジアの隣人として昔から仲がよく、大学紛争後に始まった新入生オリエンションも毎年一緒だった。しかし、共通講義の開設や「東南アジア総合研究」（真保潤一郎ほか）などの試みからさらに踏み出して、一緒に「東南アジア」を作ろうという構想は、元来「インドシナ」のものであった。特にタイ研究者にとつて、「インドシナ」は「仏領インドシナ」を連想させて決して居心地のいい名称でないようだった。こうして、「東南アジア語学科」への拡充改組が、タイ地域研究の田中忠治学生部長の時代に実現を見ることになったのも、あながち偶然ではない。

この東南アジア語学科（一九九二―一九四）の最後の年に第一巻を発行した学科紀要「東京外大東南アジア学」は、一九九八年第四巻（編集・発行者 東京外国語大学東南アジア課程研究室）が出た。ページ数も、一四一ページ、一一一ページ、一六五ページから、二三五ページと飛躍的に増えた。今後も課程紀要として充実発展してゆくだろう。

## 五 語劇覚え書

「語劇便利帳」一九九八年版（外語祭実行委員会発行）の年表「語劇の歴史」を読むと、一九〇八（明治四十二）